

夏目漱石

元日



元

目



元日をおめでたいものと決めたのは、いったいどこのだれか知らないが、世間がそれに雷同しているうちは新聞社が困るだけである。雑録でも、短編でも、小説でも、ないしは俳句漢詩和歌でも、いやしくも元日の紙上にあられる以上は、いくら元日らしい顔をしたって、元日の作でないにきまっている。もつとも師走しわすに想像をたくましくしてはならぬと申し渡されたしだいでないから、節季に正月らしいふりをして何か書いておけば、年内に

もちをついといて、一夜明けるやいなや雑煮としてほおばるくらいのものにはちがないが、おめでたい実景の乏しい今日、おめでたい想像などは容易に新聞社の頭に宿るものではない。それをむりにおめでたがろうとする、いわゆる太倉の粟陳々あわちんちんあいよるというすこぶるめでたくない現象に腐化してしまう。

諸君子はやむをえず年にちなんで、鶏のことを書いたり、犬のことを書いたりするが、これはむしろだじやれを引き延ばしたくらいのもので、要するに元日および新年の実質とは痛痒相冒つうようすところなき閑事業である。いく

ら初刷だって、そんなむだ話で十ページも二十ページも埋られたひには、元日の新聞は単に重量において各社とも競争するわけになるんだから、そのできふできに對する具眼の審判者は、読者のうちでただくず屋だけだろ  
うと言われたってしかたがない。

さればといつて、すでに何ページと事が決まってるう  
えに、頭数をそろえるほうが便利だというわけであつて  
みれば、たとい具眼者がくず屋だろうがきようじ経師屋だろう  
が相手を選んで筆を執るなんてぜいたくの言われた家業  
じゃない。去年は「元旦」と見出を置いてちよつと考え

た。何も浮かんでこなかったもので、一昨年の元日のことを書いた。一昨年の元日に虚子が年始に来たから、東北とうほくという謡をうたったところ、虚子が鼓を打ちだしたので、余の謡が大きくずれになったという一段を編集へ回した。実はほんとうの元日なら、余の謡はもつとじょうずになつてゐるわけだから、そのじょうずになつたところをありのままに告白したかつたのだが、いかんせん、筆を執つてるときは、元日にまだ間があつたし、かつ虚子が年始にみえるともみえないとも決まっていなかつたうえに、謡をうたうことも全然未定だつたので、営業上やむをえ



ず一年まえのきわめて告白しがたいところを告白したのである。この順でいくと、この年はまた去年の元日を読者にご覧に入れなければならんわけであるが、そうそう過去のまずいところばかりふいちようするのは、いかにも現在のおのれに対して侮辱を加えるようですまない気がするからわざと略した。それでなおのことつかえた。

元日新聞へ載せるものには、どうもこういう困難が付帯してよわる。現に、今原稿紙に向っているのは、実をいうと十二月二十三日である。うちではもちもまだつかない。町内で松飾りを立てたものは一軒もない。机の前

にすわりながら何を書こうかと考えると、書くことの困難以外になんだか自分ひとりお先走ってるような気がする。それにもかかわらず、書いてることがどことなく屠蘇とその香を帯びているのは、正月を迎える想像力が豊富なためではない。なんでも継ぎ合わせて物にしなればならない義務を心得た文学者だからである。もし世間が元日へきけんに対する僻見を撤回して、吉凶禍福ともにこもごも起りうべき、平凡かつ乱雑なる一日とみなしてくれるようになったら、余もまたよそ行きのいろけを抜いて平常の心に立ち返ることができるから、たとい書くことに酔っ

払いの調子がうせないにしても、もっと楽にかたづけられるだろうと思う。もっとも、そうなれば、初刷のペー  
ジも平常に復するわけだから、とくに元日にかぎって書  
かねばならぬ必要も消滅するかもしれない。それも物淋  
しいようだが、昨今のごとき元日に対して調子を合せた  
文章を書こうとするのは、ちょうど文部大臣が新しい材  
料のないのにかかわらず、あらゆる卒業式に臨んで祝詞  
を読むと一般である。

(明治四三年一月一日)



日本文学電子図書館

---

「夏目漱石全集 第3巻」

著 者：夏目漱石

制作者：宮澤一郎

出版社：春陽堂書店

1965年8月31日 初版

---

日本文学電子図書館